

小さな古い石造の教会を思い浮かべ続けていた。

よく空想裏に表象させる画像で、実際見受けたものか、夢として凝縮されたのか、知識を収集して拵えたものなのか、それらの混交物が、歳月のうちに既にわからなくなっている。

孤島にある灌木と岩との丘に建っていて、太陽に透かされた黄金の片雲が尖塔の背景にある。

私は基督教徒ではない。そしてイスラム教徒でもユダヤ教徒でもヒンドゥー教徒でも仏教徒でもない。ただ最も簡易で、勞せず自動的に反復想起ができるから、自然にしているにすぎない。

息がつけるようになると意識を明瞭とし、私は空想を止めた。余剰の情を取り戻し、以う、人間の考えすべては永世の生存と平穩との上にのみ成り立つ贅肉であり、人為の一切は欺瞞にすぎない、と。発作に悶絶していたときは、またこうして筆を執ろうなどとは毫たりとて思わず、あんな手記など全部偽りだった、ただ望みはこの苦しみから救って欲しい他になく、神さま、それが真実です、お願いです、と必死に哀願していた。聖なる教会を思い描くのみであった。

むろん、実質的な救いは人為の最たる医科学にある。ただ注射や切開や縫合などは非情な現実でしかなく、処置が終わるまでをやり過ぎながら待つものとしてしか感ぜられず、切迫したリアルな状況下においては、奇蹟的な救済への自然な、素の感情が復権せざるを得ない。聖なる家、いずれの宗派が知られない、あの教会のようなものが儂々ともせめてのよりすがりとなるのだ。

苦しみは強い現実であり、悦びは速やかに霧散する。普通でいられる安楽な生活など仮住まいのようだ。

廊下に聞きなれた下駄履きの音かし、穏やかでいられるときのみの私の現実、よれた袴姿の髻裂太舟、通称髻裂が見舞いに來てくれた。

私は懐かしい異物を見るように友人の顔を見上げる。

「落ちついたようだ、真分」

人は歓びのために生きる。欣求する。苦しみを細胞レベルで懼れ、拒み、生を否定されるがごとく生き裂かれる断裂であり、堪え難い。この二つは一体だ。

私も同じだ。そして苦痛に斃され、打ちひしがれた私とて燦然たる強き歎びを知らないわけではない。

エクスタシスはその最大だ。

幼少の頃からそれはあり、思春期に潰えた。…それに就いては又話す機会もあろう。ああ、光の海よ。脳内神経伝達物質のうち快楽を齎すものが最大に噴出したかのように超常飛翔のエクスタシー。解脱のごとくか。人は死を怖れる。もし死の呪縛から解放されたらば、どれほど心体がかろらかになるだろうか。その深い安堵たるや想像すらつかない。不死なる歎びがいかに無際限であることか。

放心していた。数日ほどは。何する気もなく。

何をしようが所詮、敗北には変わりあるまい。どうしてもそれが嫌なら、敗北を勝ち転回して勝利へと読み替え・変換するしかあるまい。またはすべてを善くば善きまま、悪しければ悪しと想うまま自然になるしかない。しかしこれは実現不可能に想われる。なぜならば、それもそうと知れてしまえば人為であるからだ。いったい、非人為こそ人為の最悪ではあるまいか。

色即是空・無機質である人間・メソポタミアの遺跡の楔形文字。ああ、汝、憂うなかれ。汝、歎くなかれ。汝、死すべき人にあらざれば。

眞神の御山の頂上の磐石にある縦の亀裂は又、彝の龍文とも呼ばれる。

さて、すっかり厭世主義的に憂鬱になり、衰弱して蒼き氣力の衰えた私を心配してか、友人が草稿を預かりたいと申し出てきた。実はもはや破り捨てようと思っていたのである。だとすれば渡さないのが普通の人間の考えであつたが、私は渡した。抗う氣力もなく、とてもかくても候、と言った。それを左に記そう。題名は…まだ決まっておらず、彝の龍文に捧げられたものとても言い擱く。渺茫たる空書だ。

…『茶陶でれ、
野を呼ばる物にし、
それ、
小孔、貫入、
あまたを生じ、
火色あらはれ、
長石釉と云釉薬を、
掛る裏にも鉄絵付、
美濃の碗也』

和歌の若くは懷紙に綴られ、床間の茶掛とされるのは、曾祖父から、名物ではない。紙茶なるも同然なるもの、祖廟が人の遺文と雖も、世辞にも善しとは言えぬもの。贅言の普請に及ぐし、古畫跡遙及ばず、紙織を薄めし紙に浸し、年経しかの全篇を醸す。詩文が水墨の類にあらばかくても、文趣それ

茶碗の解説 彼の天稟をば傳はせる。

当茶碗の志野焼があり、時折出しに傾けたりし、今しも茶室に端坐して、愛を嘖みしめていたところ、貫入とは釉薬の表にあらわれる鱗割れ、小孔は気泡の抜けた跡、火色また緋色とも謂われ、素地に含まれる鉄分が赤き斑文となり浮ぶを云う。ベンガラなど鉄顔料を以て刷くのが鉄絵である。

手にする触り、汲めども尽きぬの喩のあらわれ、山風水月、古梅の樹幹、髻膚の如く堪能せる。匠は意を凝らし作るであらうが、終は焼成の結果でしかない。手跡が残ることさらに感入る。人知を凌がれ、理數や丁解の外部にあるを見せられる。これが楽しい。

彼の名陶 銘『卯花牆』に似せてくれると申したいです。さりときよう造れるわけがない。真似せんと欲し、做せるくらいならば、もとより名匠が芸術など要りはありません。おまの謙が見紛いでしょうか。

いやはや。しかしそれでも気にはなつたようです。高台に留根文自らの名、年号の昭和、年とを刻まさせていただきます。ええ、ええ、身内贋などと言われるかもしれませんが、けして人目を欺こうとしたものではありません。

古色がないと言われるのも道理、お見込みのとおりです」

「うのはながき、ですか」

「そう呼ばれる茶碗があるのです。桃山時代に作られました」

「そっくり、ではないのですね」

「及ひもつきません」

「いやはや、いもつとも、まあ、贋作と云うなら、いたし方もないところでしょう」

「贋作？」

ふ。

「これぞそれなりによい」

「はあ」

「同じ碗はありませんから」

「そりや仰るとおりですが」

「おや、怪訝そうに眉を擡められる。疑義すべき余地のない事実と思われるが」

「無論ですよ、しかし」

「では、伺いますがね。貴殿はこれと同一の器物をどこかで覧になつたところがありますか。」

すなわちこれとまったく同じく二毫たりとも成分の種類、量の異なる陶土（二塊の土を二つに分けても双方まったく同一となつとはあり得ないでしょうね）を以て做されたまったく同じ起伏を孕んだまったく同じ形状の、まったく同じ志野釉の使われたまったく同じ色合いを做し、まったく同じ位置にまったく同じ小孔やまっ

たぐい貫入のある碗を、覽になつたところがありますか。

あるわけがない。ないからです」

「まあ、科学的に言いますか、嚴密に事実と照らし合わせれば、そんなところにもありませんが」

科学も慣例も日常生活感情もへつたぐれもない。今言つた以外の何者でもない。

だがこの碗も他の碗とともに『碗』の名で扱われている。『碗』などと、豪く大雑把にあらわれている。蔽われてしまつている。「括りにはできない具体的な精細の燦爛が均されてしまつている」。

だがそれでもいくらかはります。

もしこれが人間以外の生き物であつたなら、ただのかたまりでしかありません。茶碗も鍋も漬物石も同じです。自分にとって何らかの關係がない限りは、餌の入る容器物なら好ましいもの、程度でしょう。鍋でも漬物石でも餌が盛られれば同じです。

すなわち自分にとって何であるかとなつてであつて、それ自体としての情報を必要はしない。まあ、よくよくは人間も同様なのですが、ともかくも人はそれ自体として何かであるところを受け入れている。他者として存在するところを是認するところができる。それをそれとして把握できる。一応は

そう比較してみれば、いかな大雑把でもいくらかは、とは言えるのです。

しかし、これは人間以外を侮る意味ではない。どうしてそんなところができますようか。『碗』と観るのとただ好ましいものと把握するのとは、相違あつても境界がない。

小生はこれらを諸概念と呼びますが、一概そうと申しても、事情様々であつて一概で劃するところがないからです。

なぜなら、諸概念の一切は、生物が生きて来た経験を累々と積み上げた歴史の産物だからです。その累層は層と層との境界線を持たず、無限とも思われる重なりとなつて遺存しています。

今日ある諸概念二切は、実に我々が単細胞生物であつた時代（或いはそれ以前）からの重層なのです。それは縦の重なりでも横の重なりでもない、奥行きイデプスの重なりです。

まあ、開けたままのお口をささいで戴きましようか。貴殿にお訊ねいたしましたようや。畢竟、我々の生きる世界をどのように考えられるか。

炙られた鮑ちゃんあるまいし、むずむず唇を動かすのみか。

わかりました。いや、よいです。お聴きあれ。

たとへば生きるとは、世界を持つことに他なりません。他者との干渉や、他者を以て倣情、考慮、活動すべです。それなくしてはいつたい、いづくへ足を向け、眼差しを遣り、何をか志せと言つか。すなわち他者との関わりを指す。自らの殻からの超越です。アメーバのような生物であっても、世界観を以て生に臨み、そこには既に諸概念の揺動の姿があるのです。先天的に内奥在し、いづれからともなく湧出する動機に衝き動かさ

れて世界を做し、世界へと超越するのです。

虫類が飛んだり、蠢いたりする運動空間や、諸細胞内の有機的な化学反応も一つの世界であり、諸概念の祖先です。我々の脳幹の上に爬虫類の脳髓があるように、数億年来、最も単純な諸活動から積み上げられ、その結果が今であり、我々は生まれたときから全世界を知っているのです。

世界観は生命発祥の動機の内から湧き出たものであつて、外界の模写として生ずるものではありません。

その興化する動機は、太初においては、物質的反応によつて顕在しました。これが諸概念の原形です。そこ云う意味では、有機物は、いや無機物まで諸概念を持つと言ふのかも知れません。

やがて刺激に対する反射として、生命活動、生きんが為の行動が生じ、それが原始的な世界観となりまゝ。そして後代には行動と情動との境界のない緩やかな分節を做し、反射が内部的には感受としての情態を做し、行為を促すシグナルとしての意味を持つようになります。これを強引に区分して概括し、無理に普遍性を附与し、誰が見てもそれ自体として独立した一般做し、俗言で云ふところの諸概念としたのです。

ここで留意すべきは、外界との関わりとの反映ではないと云ふことです。

小生には、これら世界観の変遷が、自説的なことを拒み、より外へ解放されんと欲してかの如く観せられるのです。脱自態であることを志向しているかのように直観せられる。全宇宙の開闢であるビッグバンが既にその性格を持つて生誕したようにこそ感ぜられるのです。

未だ人間の本性は脱自態を志向し続けています。

到底、諸概念の大雑把さに耐えられない。いつでも我々には製作物が不出来に映えるのです。もつと際立つて独立し、多くの情報を盛られ巧緻に、高次の完成に及び、より精細であるものを欲す。より自らに関わる他者的の極限を求める。

現在のよつに、一つ義を以て強いて収斂された平坦な諸概念に満たされたい。

脱自態を志向するとは、未来への志向、現在からの解脱です。恒常的脱自態だらんと欲し、敢て異逆を做す。現世界はリアリティのない、形骸として観取され、捨却せんと欲し継がれねばならない。

たとへば

「いや、高説はあり難いのですが、わたくしは」

「承りかね候。です。小生、興趣の情が叙詩神の如く鬱勃として参りましては、今述べ尽くすにはいられない。本日、貴殿にあつては一生涯の優遇の日となります。

さあ、神託にも等しい我が言説、ご聴従あれ。

まず我々人間が知らずして世界が形骸、またリアリティなきものであるを観取し、これに覺す焦燥しているかを気づかせて進めましょう。知りて後となれば、外への解脱を欲さずにはいられなくなります。

まず諸概念を以て做された世界とは、これ喩にすれば、静物画の如し、です」

「あれ、ちよつとお待ちください」

時間性が考慮されていないと云うことをお考えください。

森羅万象は瞑黙のうち同一性が期待されている。一秒後も一秒即ち、林檎はその林檎であり、あつたのだとされる。人間の脳裏に描かれるすべては静止画像状態になっている。それが余計に実情を合わない、即きないと異逆的に感ぜられる。

無論、このことは感覚的に不可思議ではない。

どんなものも各々の瞬間のそれではない。ここへ言う瞬間とは無限に短く、面積を持たないと定義される数上の点に比されるべきものであり、すなわち一瞬たりとも同一を維持する時間もなく、『碗』が『碗』でいられる時はない。同一性の維持は為されない。一合のみの邂逅ではない。

それ、碗を覧まれ。小生の言葉に相違ないとは思われませんか。

而して事実、それはさうだからさうと見られると云うのみではない。それもれも皆インパルスの内部の架空にすぎない。仮設にすぎない。とすれば、何だと言ふのでしょうか」

「インパルス？」

脳神経細胞の内は外の組織液に比べるとカリウム・イオンの濃度を高く、イオン濃度の偏りが内と外との電位差を做し、静止電位の状態にあります。

ところがグルタミン酸などがその樹状突起にかけられ、チャンネルを開かれ、カリウム・イオン以外のイオンの流入を受けます。そしてカリウム・イオン濃度が組織液より低くなると、電位差の逆転が起ります。これが脱分極であり、発火的な現象をインパルスと謂います。

随時、これによって諸概念が具象され、意識が顕在化されるのです。大海原と蓋微と、飯の美味とや風邪熱のたるき足し算も夢想になるのです」

「いやいや、さうでした」

「それが、さうで、どうでもよい。百聞一見にしかず。

小孔や貴人によつて做された表面は、ゆつたりとした丘陵地の起伏のようではないですか。素際、これも二つの丘陵です。事象が事実であることの伴ひが眼裏を抜き透りませんか。これは殆ど古絛の墨の枯淡と思つてよい。いかにもありがたい摩訶般若波羅多心絛亨本も、そこに実在するのはただ占ひた紙本の上の、乾潤ひた墨汗のたたまいでしかないではないですか。

いかがですか。

わからない？

そのとおりです。事実は不可得が本来、かようを云、妙義と申す。

おのれの体験を振り返つて、覧なさい。よく閲しなさい。

砂糖を舐めれば皆 甘いと言うが各人の感でているものが同一かどうかは確かめられない、その人の味覚をじかに感受しない限りは 甘い、甘い、とは言うが個人の直観体験以外に真の伝授はない。

その奥深いこと際限なし。事象に直参するこの歓びに窮みなし。

この志野なままと凡庸な碗です。日常の碗と比べ、さして違いもない。常識的鑑賞の見地からすれば味わいなど皆無です。飲んで惜しまれることもない。それは一言語を絶し、狂突する無際限ならんや。

指で表面を愛でてください。ただ真鍮にのみ知られる妙に適たしてください。

どうです。だが再び撫でてもその触感は 度々は繰り返さない。一会のみの邂逅です。いやいや一刹那の接触においてさう感で到底二つ定義ではないのです。自然の倣す微妙、それは古人の筆による糸掛の如く甚深い。小生をして身をも裂く焦燥に駆る静謐があります。

一瞥あれ。そこいらにある檜木や楠木と何が変わりましたか。於、庭前の柏樹など言いつてしまつては少々あてすぎます。かような碗など、卓袱台の上の飯盃が如し。何をか謂ふべきところがありましようや。されどまた、いや、さなれば、そ、あからまじいかくも深きる哉。

それ平常たること進む清冽が如しです。

岩魚の一匹が軽やかに身を返し、愉げに泳ぐ。水の底の細石が眩いくらい楚として、空気中に置かれた物象よりもくつきりと、濃く生々しく映じています。そして魚は跳ね上がり、その尾鰭を燦めかせます。虹を閃かすかの移ついを倣す鱗の燦爛です。

一瞬、暗鬱な雲が過ぎつて翳れば、その魚影は金粉を漆で固めたような、若しくは螺鈿の底光りのような、滲むような燦火を倣す。

それは大きな屋敷の昏い広間の奥に端坐する金屏風の光りともやや異なるのです。どちらかと言へば、暗闇に置かれた蒔絵の沈鬱な雅を思つて戴きた。笈笈簾の意が唐突に、夢破るよに貫きます。

さあ、そうなれば能楽の鼓の拍たれ、その後つゝの襦袢には峨々たる奇観の岩壁に松の枝を張る姿。

險の裏にたゞのは、樹幹の表が縄文様のように波打ちくねり凹凸を倣す杉です。その巨木が朽ち果てて折れ、周囲に神肅なる沈黙の域を倣す。辺りには、赤茶けた磐に長く濃緑の苔がむし、雨頼りて蘚を倣す。シダ類の生える霧の軽やかな森厳、樺の木膚と照葉との妙。

雪で寄せめ峻岳の尾根に巖の壁が倣す過嚴なる神性、蒼鷺、熾るよに白く輝く雲、無窮なる乾燥地帯、岩丘の群れ、強く断ちかて暗く見えるくらい烈しく濃く黄昏、大麦の鬚の揺れ、風化による陵の深く複雑な翳の彫り、イエローゴールドに染まる土たちがわすかな草を食む。

時が止まつたかのようなこの悠久の風景は古代から何ら変わっていないのです。日没後つて天の河の壮大、我が大地はこの虚を轟々とともに飛翔している。その凄絶な沈黙が聴こえませんか。

それは木皮を剥いて重ねたような柿板葺の粗い味わいが倣すあの感です。

ノートルダム大聖堂を背にし、島の舳先に立つて、目の水戸を眺める少年のいるセピア色の写真。

ミユートとせたよランペットを、口を窄めて強く吹き、ひずんだ硬質な音に做したときの音の触感にまじわるリアル、即物性です。

これらが同時に指先の皮膚に感ぜられるのです。触れた陶の表層の起伏でしかないこともまた確かなのです。どうですか」

「わかるわけがありません」

よきかな
善哉。

仰るおりですな。一刹那たりとてもれに触れ、つかむことが夢にすら為せない。

だが確かに見えてはいる。見えているのに、匂いがあるのに、触れられ、聞えるのに、舌先の味膏に沁みているのに、つかめない。ただ、把握できないだけです。それは捉えた瞬間には既に喪われ、異様を做している。だから、つかめない。そう感ずる。こんなことがあつてよいのか。しかも日常的現象に、当然のようにありふれている。

捉えられるかどうかとなつ以前に、捉えらるゝスタイルに自家撞着があるかのよに見え。

無論、捉えられないのは、時間性の為でもあります。さつきも叙べたとおり、この碗は一秒後にはまったくの同一物とは言えなくなります。一億分の一秒後でも、一兆分の一秒後でも事情は同じです。一瞬たりとも同一性を維持して止まるなどとなつてなす遷移し、移り変わりに境目となつものがありません。それがその者であるとなつて、既にそれ以外の者であると言っているかの如しです。

ただし仮にそのような時間性となつものがなかったとしても、貴殿が『不可得』わらないと言われたとおりに、事象は同一性を維持しないかの如く、捉えられない。同一の瞬間にあつても同一のものではなく、斬易、スタイルの背の移ろいの若く、無限の多義性として受け止められるのです。よつて捉えらるゝ形式自体が喪失の形式のように感ぜられる。これよりも原的な線繰りが仕組まれている気ださする。はてさて、かような様相を眼前にしては

考え込まざるを得ない」

別に、わたくしは

戯れ言を申される、よいですか。これは人類、畢竟の課題の一つです。一大疑惑です。烈しく追究し、熾きされなければなりません。

もしも同一性を維持しないならば、すなわち変異するものであるならば、時間の流れを伴わなければならないが、それがないとはいかなるとか。時間、無関係な変化すると思ひ描けるでしょうか。

できません。だのに時間性、関係なく、同一時間内に変異するかの如く見える。どうなつてか。何ゆゑか。

さあ、お考えあれ。御身の心を、照覧くだされ。

いかがか」

相像すら及びません」

「ふ。

まず一つ考えられるのは、自然が同一の瞬間においても同一性を維持しないのは、自然の做す戯れたとする説です。だが待つてください。いったい、我々が観ているものは、ほんとうに自然そのものなのでしょうか。違います。内奥在する動機が発露が累積された世界観です。その『自然』像です。

だがそうだとすれば、これは異常なことです。要請による製作でありながら、その配慮を欺くかの如くに収まらない。かつちり嵌まった、とちう感じを起させない」

「はい、はい、脱目態への志向のせいだと仰りたい」

黙らつしやれ

戯論を吐くでない。

ほつら、直參なされ。困惑させられる。生きて行く為歴史的に累積され、生きる足かりとして把握の為に做されながら、収まりがつかず、嵌まり潰れどちう、合致のエクスタシスを与えてくれないのです。

なぜか？」

「ですから、ちうきむ」

「はたまた逆に、なぜ我々は同一性を維持する本質を做すしては、もてを捉えられないのか。

無論、そう問わねばなりません。このことをも同様問わなければならないのです。捉えどちう動きの独自の構造が、構造自体において自家撞着し、構造自らの趣意を却逆するように見受けられるからです。

それはどちうことかと申せば」

「いやその、もうわかりました」

「いいえ、貴殿にはわかつておりませぬ。

ここが肝要です。よいですか。聴かれようござす。

すなわちとてもかくても収まりつかぬよう、あらかじめ定められているから、結晶的には見極めよう

「ですから、言っております」

そつは逝かん。逝くものは、一瞥しあれ。

見極めようと眼を凝らしても、収まりがつかないようにあらかじめ定められているから、結晶的には見極めようと思つた対象に同一性がなく、捉えたいものであるかのように焦燥され、同一の瞬間内に無限の諸概念が汨濫するかの見損が生じる。

『自然』像が常に、同一性を無際限な精細巧緻の具体を頼むかのように映するのは、これが為です。自然は捉えがたく感ぜられる。

また諸概念が形骸と感ぜられ、具体の様相を捉え切れない不出來な膠着物、妥協ならざるものとして観取され

る。

「どうです。もつともしゅう思いませんか？」

「お見逃いしました。参りました。では本日は」

「終わりではありません。お坐りなさい。

思つてもみなされ

把握がリアリティを倣さない、と云ふ見掛が倣され、欲求が終わらない。むしろ駆られ、拍車がかかる。より過剰に欣求して飽くことがない。魅せられたとは、このような情態を謂うのではないだろうか。

範疇表に収まる諸概念を以て観取されながら、同時多義ゆゑに収まらない。把握可能の外たるに見え、思いも及ばぬ精細巧緻が無尽蔵たるように垣間見られ、これに焦がれ、炙られずにはいられない。

リアリティが持つ真刻の光の魅惑に囚われるのは、これなれば、ではないでしょうか。精細巧緻を求欲せずいられない。強い鮮を、烈しい明晰を、リアリティを求欲せずにはいられない。

しかもこのことは、原初以来、内奥存する動機が外へ勃発し、顕在し、さらにはより拡大しようと欲する超越への嗜好性、脱目態への志向とを致する

「まあ、ですから、もつ、それは」

「また逆に、リアリティ感覚が我々を惹いて止まないのは、そう云つた理由があるからだとも、言えるのではないのでしょうか。」

リアリティ感覚を得ようとするれば、理数や了解の外でしか得られないように感ぜられるのもそのせいではないでしょうか。充溢した、生の瞬発的炸裂である追真感を欲すれば、理数や了解の外にしかないかのように感ぜられる

「はい、はい。まったく以て、そうです。理数や了解の外、が妙義です。と云ふこと」

「いかにも」

「またこれが茶陶の魅惑でもある。」

内奥存する動機は脱目態たらんと開闢し、より外へ、より客観的に、より物的に、より精細巧緻な他者の具体へ、すなわちより他者的に、より乾燥、より非情、より例外へと拡がり、奔放たらんと欲す。

当面は、次の段階である『普遍的一般、かつ精細巧緻を「佚しない」へと向かつて進化せんと欲す。不可能であつたとしても止めることはできない。これは生きる上自体なのです。脱目態への志向、エクスタシスの幸福を求欲するとは、全論議以前です。なぜなら諸概念はその後、それによつて造られたから。

脱目態への志向を問い糾すことはできない。それがすべてだから。部分ではないから是非や可否にならない。体感的に言つても、人間が脱目を希求し、より深く、より高く、より大きく、より強く、欲ひの最刻を求めることが、どうして論ずべき対象たり得ましようか。避けられぬことを争議しても、なきものを学究する如く無意味で

す。

論駁などいふ結果しようとも、鳥居の衆です。いかなる説を立てても、人間の一切行為は結局、人生を魅了し、飽かせず惹き縛る歓びを求めてのことにはすぎぬではないか。

幸福主論は絶対論であつて、誰もが日々目にし耳にする人間の事実であり、是非を問ふことは、虚論にすぎない。事実が事実としてある。

貴殿、いかが感ぜられるか。

小生には、このような譚議外の認識、不快い。脱^{エクスタシス}自^{ハミ}的^スな歓びに貰われる。

人間にとつては、諸概念に束められる以前の事実が、完全なる他者としての、完全なる客観性としての、事実として感ぜられる。所謂『真実』として感ぜられるのです。

古采本邦においても、神道は清々を重ね、元来は人為の做せる社殿がなく、現住にもまた鳥居の尖には那智の御瀧もあるばかりの飛瀧神社、或いは輪山の山裾に鳥居が設けられるのみにて、天照皇大神をお祭りする檜^{ハヒ}原神社^{ハヒノハラ}があります。

そもそも理^リ數^{スウ}了解^{リョウ}だと申して、我々は何をわかつているのでしょうか。

たとえば我々は諸概念がかくなるすがたに定められた醜^{みにく}さを知らない。諸概念を以て事象を把握できても、それ自体が脆弱であれば、これは無知と言ふよりも、むしろ非知です。

我々人間は、もともと理^リ數^{スウ}了解^{リョウ}の外部にいます。また諸概念は概念の中庭^{ベテオ}においてさえ、何者でもない者にすらなれない。

なぜなら、理^リ數^{スウ}了解^{リョウ}とは実に理^リ數^{スウ}了解^{リョウ}などではない、諸概念が何であるかを考えれば明らかです。

諸細胞の働き、また普遍的な一般概念について言へば、インパルスの伝播にすぎない。

ニューロンの軸索にまでインパルスを伝えられ、その尖にあるシナプス小胞を刺激され、神経伝達物質、グルタミン酸などを分泌させられ、受側のニューロンの樹状突起にある受容体に向かつて分泌物を発射させられ、受側細胞のナトリウム・イオン・チャネルを開かれ、細胞外のナトリウム・イオンを入れられ、カリウム・イオン濃度が高かつた細胞内のナトリウム・イオン濃度を上げられ、内外の電位差を逆転させられ、静止電位の状態を発火的現象せしめられることです。

これを以て畢竟、諸概念とは参^まや、と紐^ひされても答へようがない。ただ、虚妄に了解が生じ、納得ごころの心的な事態が起つていくにすぎない。

実に、これこそが考えられる限りの、最高の、最強の、最烈の脱^{エクスタシス}自^{ハミ}です。幸福の極限とも言つべきものです。

「いんえいそくすうの、ごうけつしやう」

考へても、覽^みなきやう。

精神と思考や理性や観念と言つたつて、微の繁殖や菌類の繁殖と何ら変わらない。アメーバの分裂と同じ、ウィルスの活動との相違はない。有機的な化学反応にすぎない。物的現象しかない。

諸概念には本質たる資格なりあり得ない。一切の事象の本質には実体がない。すなわち舊は眞ではなく、

愛は愛情ではなく、明日は未来ではない。古来白く一切皆空とは、指して之を謂ふ。

いかがか。かよう妙義を碗に觀照し、こゝ静かに参入する。奚ぞ愉しからずや」

云つてですか。

いやいや、ですからね、常々思つてはいたんです、骨董賣の愉しみや、こたわりなんてものは、わたくしにはちよいと高雅すぎる趣味だな、つてね、まあ、もういいのです。お話すべきとは全部お話をさせていただきました。色々世話を戴きましたが、いかせん昨今の株価の下落、銀行の貸し渋り、田安、不景氣、商売も年々縮小いたしました、わたくしが如きの道楽者、一番に年貢の納めどきと相成りまして、

さようなわけですから、はい、もうともかくもこれにて、悪しからず」

囁口がぴしやりと閉じられた。飛石を逝く聲がし、それも消えた。

のどかな暈月である。

雲雀の飛ぶ声。畳の上に置かれた茶碗。茶釜とともに、茶杓が碗の口縁に架けられている。白竹の一本樋で茶入れから抹茶をすくう為の細い竹筴なのだが、中ほどに竹の節がくるように詠われ、そが少し持ち上がった、蟻腰と云ふ見掛け、丁寧に漆拭がされている。

碗に茶釜を廻した。

床の香炉からなげない煙が昇っている。香豆花入れが置かれていた。眼を落す。金襴の裂地で作った什履には絮が入っていた。濃茶だからだ。

一服する。

曾祖父が興した家業をようやく手伝うようになって四ヶ月余りで古陶磁講座を開講するまで、尚早を超えて驕慢だと云うのはわかり切ったことであつた。だが畢生の思想を著き血潮に伝えんとの思い止みがたく熾つた過日、ビラ教牧を貼せずにいられなかつた。広霧者は一人、五十年代半ばの香氣独り者で、乾物屋の親戚であつた。小生、二十五歳と云う年齢を鑑みれば、若人とは然十七、八歳を上限とする年少者を指すが、ないよりまして自ら叱咤激励し今日に至るも、終に去られてしまつたわけである。

講座は、月を待たずして廃れた。

囁口をくぐり外に出、井戸や手水鉢や石灯籠を左に見ながら四つ目垣の中門を通り内路地から外路地に渡る。延段を過ぎて、無人の腰掛待合を右にし、母屋に向かつた。

内々関から入って店舗の方に廻り、番戸にすくまるように店を覗いていた婆さんに声をかけた。

「もつ今日はなくなっちゃったよ。俺が替わるさ、婆ちゃん」

祖母に見上げられた。眼を細めて皺に埋めている。哀しくなった。

「ありや。ええんか。すまんのう。ほいじゃ。そら。やれ。よいきさあ」

黒い床板の上に婆さんが敷いていた海老茶色の坐蒲団に坐った。ガラス戸越しに通りを見遣れば、路を挟んだ向かいの煎餅屋にも婆さんが坐っていた。通りは重吾神社の参道に繋がっている。その逆を行けば旧街道とぶつかり、道は十字路となっていた。五月雨が降り始める。

寂れた店であった。畳部屋だから土具いばかりなのは仕方ない。

『關原十結城養漆堂』とは、鎌倉の持氏卿が室町將軍義教公との合戦に敗れ、嫡子義成とともに切腹果て、次男三男らが下総の結城氏朝の城に逃れると、持氏恩顧の武士とも呼ばれずとも結集し、永享十一年より嘉吉元年の四月まで籠城したと謂う故事に由来すると云う。なぜならば我が祖先もまたこれに参り、陥城の憂目に期せず命を助かり、遁れ遁れてこの龍脊の地に落ちたがゆえに、と言っただが。何か理不尽である。以前より地方豪族であつたと聞くのは、代々村の豪農であつたことがまず確かなので、そんなこともあつたかもしれないと受け流せるが、結城の合戦まで言われるといくら何でも、と得心しかねる。

要はどれも読本臭いのである。と言ひより文化年間を買ったと思われる和綴本が我が家に残っており、その出だしがとてもよく似ている。本は今も店內に飾っており、売物ではないが、ガラス棚の中、客の閲覧に供している。

有像読本の肇輯五冊で、關原に關かれた頁は総目録。その末尾に『肇輯題目通計二十回 完』と云われている。

曾祖父の道楽が常し、田畑を度つにしてまでも成した畳部屋がその扇額を古瓦の上に掲げたのは大正十五年のことである。『關原十結城養漆堂』の名を決めた曾祖父にしても父祖らの言葉を信じたまでにすぎないのであろうが、わかっているながら諷刺的に附したのかかもしれないと思えなくもない。

遊郭に通っていたのか、遊郭から家に通っていたのか判然とせぬような人だつたと謂つし、酔狂で、と云つのもありかとも想ふ。小生がかゝあるもその血筋か。因みに曾祖父の父と云う人が念仏屋と呼ばれぬくらいに眞宗に熱心な御仁であつたのにと囁く人もあつたらしいが、その寺の娘を娶つたことを思えば、さほどではない。

祖父である大伴郎は老鬚を蓄へ、豪胆な人である。今日もまたいわれの知られぬ茶陶に大枚を叩いて帰つて来た。午後八時を過ぎており、表戸を閉めた小生が落語のCDの音響を絞りつつ、ガラス棚を眺めていたときのことである。

眞今、これを見ろ。信樂だ」

梱包を解けば緋色と灰色との茶陶が現われる。

爛れたような面には、火ぐれ、ふりもの、ひつぎ、火割れ、石はぜ、灰被り、こげと灰の做す信楽陶の特徴で霽れんばかりあふれ返っていた。窯炎が粗くうねり固まったかのように見える。信楽に人為はない。すべて窯の自然が做す技である。

手に取ってみた。

釉薬のない、緋を煮た明るい灰色を聞する。古来良質で知られた信楽の土に相違ない。腰胴を指の腹で撫でる。珪石や石英の粒が入り混じって木々を噛み、松薪の滾り降らせた灰を被って膚は畸形の妙に富む。延宝六年（一六七八年）の文獻に六窯が記されたとの記録があるも、京の近き景色である。江戸時代、高名産地でかように原始的な窯を使用するなまなかつたのではないか。無論、本品はもっと最近のものであるが、眺めるほどに此れの緋は切なく感じられた。

いつしか祖父の存在も薄れ、思いに耽る。遠き夢に引き込まれた。小生は初めて幼稚園に行つたときのことを憶えている。外に独りで出られず、家籠つていた子であつた。為、園友らは会つたことのない者ばかりであつた。孤立し、頭わに晒された状態の小生には、彼らのさけたりはしゃいだりする普通の態度が見かけとはまったく無関係に、異物として迫つた。乱暴されたように感じ、心傷つけられた。怖くて、疎外感を味わい、泣き喚いたものである。

小生には人間のエゴが怖かつた。剥き出しの敵意となつて映るのである。わずかであつてもそれを嗅ぎ出し、自分が踏み躪られる気がした。自身にエゴがなかつたなどとは言つつもりもないが、他人のそれを赦せないのだ。人の眼を見ることが畏怖した。そこには欺瞞と自己肯定としか観しられない。またそれは他人に悪意を持つことの罪悪感のせいでもあつた。

幼稚園時代の二年間、終に口を利かなかつた。通ひ続けられたのは係的な、規則への遵守を性とする癖の為であり、父母にわるいからと思ふ自責の念、すなわち自己憐憫的な諷刺であり、矢面立立つことを拒む小心で、悲觀主義的な甘えのせいであつた。

高校を卒業してからは、しばらくの間、本屋廻りを目的として、龍谷村の駅から二つ目を降りた難入^{なひら}の町をうろついた。自意識の強い年頃であつたから、自分も二端なのだと強いて思い込もうと虚勢していた。書籍の代金を払う際に緊張して店員の顔が見られなかつたにせよである。

その日も古本屋で買った『無閑』をすぐ読みて、喫茶店に入つた。ほいが、強張る顔が恥ずかしく、氣取つた表情を做すも、坐つて組んだ脚が痙攣し、卓脚を蹴るに及んで発汗する喉がしわがれてしまい、給仕された珈琲碗の耳に廻す指が震えて波させる始末。

動揺し切つていたのはもう二つの理由があつた。

小生が着席した後に向かいのテーブルに坐つたのが女性だつたせいだ。それで症状に拍車がかかつてしまった。腕を動かすにも棒を振り回すような感であつたし、鼻息が急になつて、頬を緩めようにもぎこちなく、平衡

感覚が失われたかのように手をどこに運び、足をいずれに置けばよいのかわからぬほどである。だがきき過ぎた意識は霧に包まれるように喪われた。それもまたすうりと背の高いその女性のせいであつた。

顎が滑らかに朱り、鼻筋高く鼻腔が縦長、^え瞼の重が薔薇の花びらを倣すようにくっきりと眼の上部を縁取り、独特のまろみを持った薄い茶色の眸がある。顔の全体が華やかな造りで、晰らかな輪郭を浮き彫りとするのに、膚の風合の為か、水墨のたらし込みの技法を施したかのようなまろみがつかすような柔潤な肌を弄響させていた。^{みひ}睜か^{みひ}れているような眼差しの、大きな双眸がゆつくりと動く。それが繊細な優美を帯び、見者の胸中を疼かしめる。

だが彼女を象徴するのはフアン系インド系の人らの眼周によく見られる暈のような、眼窩の色合ひであつた。瞭かに化粧でなく、生クリームに溶けたチヨコレートを垂らしたような色の変化を孕ませ、柔らかな繊細さに喩も及びつかない。

小生は軽い陶酔を覚えた。

俯いて卓の寄木の意匠に目を投じては、上目遣ひに盗み見をするの繰り返し。傾けた碗に唇をあててから既に空いていたところに気がつき、飲むふりをして尿す。距離を誤り、受け皿に尿をさせる。顔が熱くなったが構つてもおられず、時折瞼を固く閉じては、その裏に焼きつけようといがける。

彼女はメニューを見続けていた。初めてここに入ったようであつた。少なくとも以前には見かけていない。小生も毎日いるわけではなかったが、彼女の仕草にそれが漂つていた。注文を終え、彼女はギヤメル色のバッグから小冊子を取り出す。小さいが薄つき角背の上製本で、カバーはなにも魚革があり、金の型押しが純白の表紙にバレス・スクリプト体で題名を細く走らせている。小生はいよいよ酔い痴れた。その繊^{かよわ}い文字に身の奥をくすぐられるように感じた。

彼女が行を追う度に上下する睫毛は、貴石や金銀細工で造られた機械仕掛けの胡蝶の羽を下よさせる如きで、その度に眸の虹彩が雲の流れに深く翳されたり明るく燦めかせられたりする湖のように様変わりする。

給仕の一人が髪靡かせる十九歳くらいの男で、白シャツの瘦身に長い黒前掛けをはためかせていた。

小生には、彼の目線がどうにも彼女の上に留まるようで、気にかかつて仕方がなかった。

淡い嫉妬心が芽生え、藻糸色のほかしを倣して滲む。やがて招来されたかのように濛々たる暗澹が破滅の予兆を孕んで膨らみ、胸中から末端へと緩やかに伝播した。併せて患惑が図にあつたような痺れと興奮を覚える。彼女を奪われてしまつてはいないと、どう畏れや競争者への敵意、憎悪、自分が成せないことをいとも容易く成そうと欲する年少者への嫉妬に苦しみながらも、生来の執拗な気性が立ち現われ、暴かなくてもよい傷を裂き開くかの悦びに身を震わせて小躍りした。

どう云つてかと言えば、小生の気分が或る種の残酷性を帯びるのである。人がすまし顔の裏に隠す生々しい欲、偽りや自中心性を微細までも嗅き分けて穿り出し、自ら心傷つきながらも鞭を欲する者のように解剖し、執中

し、自身は犠牲者であり、虐げられた者なのだと心中で髪振り乱し、詰り訴えるのであった。嘘を吐かれ裏切られたいと待ち望むように、少しでもそのような想の要素を窺わせる兆候を捉えようと、事実を曲げてまでもう解釈するのである。

自虐的に「目」を不憫に貶め、感傷するところが要素ではなくはないが、どちらかと言えば紙のすりしなから待ち伏せし、機を捉えては、ねぐるように相手の不義を牽け連ねて突きつめ愚弄する逆上の被害妄想であった。「それ、それ、やっぱりおまきはてんな奴じゃないか。おまきは嘘を吐いた。強欲、その醜態を知れ。おまきは騙したんだ。裏切り者めが」と罵る溜飲である。誰に対しても言いがたい、方向性のない復讐、残念、自己の尊厳を破綻させて厭わず、なりふ構わず喚き叫ぶところであった。

まるで至誠を辱められた者にもなったかのようにである。小粋な年少の男と優待性の強い女とが小生と暗鬱人にはわかりかねるやり方で要領よく惹かれ合つたようなこの段階ではまったくの妄想であったが、情原に接すると、禁欲の誓いを立てし聖職者が心奥に宿すわけれた歪みのような憤りが迸り出るのだ。

このような書地悪さや妬みを発する自己の根底に強い敵愾心の存在を感じた。敵愾心とは懼れから生じるものである。懼れとは自己の安立性が脅かされ、自らの存在が否定されることへの懼れであり、これに対する逆上の抵抗反発が敵愾心だ。微弱な過剰かの程度差はあれ、どのような人にもそれが備わる。他者こそものすべてが自己に対する抑圧者だからである。緊張を強いるものであり、ままたぬものである。どうして敵愾心を懼れを抱かずにいられようか。自制を保つていられようか。生き死にの問題にも繋がると思えば、憎悪を孕ませて当然とも言える。

事実、小生は手を逆立てる猫科の獣のように憎しみを滾らせていた。その若造にはもちろん、彼女の存在自体にもである。それは埋不尽で狂暴で、どんな矯激も犯しかねない癡情であった。

現実世界を生きる以上、誰もが心底潜めているものだ。思っに任せぬ他者はかりで構築された夢世でどうしてこの憂を溜めずにいられようか。

そうではないか。一切の存在者は他者であり、他者とは自己から乖離した、異質な者、疎外する者の像であり、抵抗性のことであつて、背者であり、阻害者であり、原則的に我が方を否定する顕在、違和感、調停の必要性を感じさせる者、氣遣いを生じさせる者だから。

所謂『意識する』とはこのことであり、緊張の表明に他ならない。

それが自分にとって何であるか、が気に懸かるのである。自己の欲求を満たしてくれるのか、自己に対する脅威であるかに関心があるのである。自在無碍なる状態を求める存在である霊長類にとっては、これだけでも既に充分な抑圧である。いや、欲求を満たしてくれなかったり、脅威であつたりすれば、敵愾心若しくは懼れを抱くのが生命体の普通であつた。

すなわち小生はそのとき、自己の態度をよびに分析していた。

かように解剖的な分析を嗜好するのは、幼少の頃からの性癖で、自身れをして「 realism への渴望」と呼び、美讀していた。真理への欲求など案外こんな程度ではないか。だから思ふ。人が言う真理の質を試すには、その論理的正確より、動機を極めるべきだ、と。理知的な意為行為をも生物学的な質地から解剖すべきなのである。などと思索を繰り返して待つ続け、終に小生の希いどおりのことが起つた。給仕が来て彼女の注文した珈琲を卓上に優しく下ろす一瞬に、彼らは互いに眼を合わせた。男は去る。象徴的に見えたが何も起らなかった。小生には充分であつた。心が爛れ烙かれる嫉妬とともに、彼らに對し「見たぞ、さああな」が噴き上がり、雀躍目裂する。

それはバロック様式の宮殿に整列した正装の喇叭隊が高らかに王者の到来を告げる高貴のファンファーレであつた。

やがて彼女は本を閉じ、BIBLI (らしき) リスト・ウォッチを一瞥するとジャケットを翻すかの仕草を席を立つた。

人々が思い思いに語らうカフェで小生は独りとなつた。周囲は平坦な画面にすぎない。音聲はエコーがかつた再生音であつた。違ふ場所へ録音したものを放送機で鳴らしているように聞える。

いったい、彼ら群衆は何を語り合ふのか。人は皆、自置定の為に人の行為を否み憎しみ、論説や作中寓意を示したり称讃したり、失恋した友に同情したり、不幸な人を憫れんだり、正義を唱えて批判したり、虚構される人々に無関心だつたりしているのである。そこに何を期待できるのか。

我々は自己と云ふ体験の、球体の中に隔絶されている。

いったい、人は人に何を期待するのか。

だがそれなしで生きて行くことは、考えられない。愚かな、また愚かな無為だとは思ふなくともである。

翌日もまた、電車に乗り、薙人養軒を降りていた。

喫茶『サン・ミッシェル』のガラス扉を開ける。坐る。メニューを眺める。午後時、彼女が来る。小生は和綴本を出して読むのをする。給仕が着早く近づき、彼女に微笑む。仔細洩らす観察する。

非現実的だつた。薄膜のうちに封じ込められていて、何も彼もが間接的、一次的で、ほんとのことは何一つ起つていない。焦つてもあがいても已然虚しくもなくにすぎない。被膜の生暖かい毛細血管が脈拍する感触を覚えるだけであつた。

やがて彼女が去る。小生は残る。日射が茜に傾くまで待つかのよに動かなかつた。埃が燦めくのを酒中に舞う金粉のようだな、と見据え縛っていた。物が鮮やかに濃く映る時刻。日常の持つ眩暈のような静けさがあつた。

翌々日には男が接接し、女は微笑んで応える。俗っぽい、小生には耐えがたいの外の空気がそこにはあつた。

見続けないといけない美しく悼ましい光景、或意味、無関心に古い映画を眺めているようでもある。

小生は熟慮の末、結論した。

無為だ。諦めるべきだ。だつてどうにも自分が言うことを利かないではないか。求めね求めるほど、斥力が働く。意識すれば意識するほど、乖離する。やれる奴にはやれるが、やれない者にはやれないのだ。

どうすればいいのか、寧たりともわからなかった。彼女は小生以外の人間である。どうにもならなかった。他の普通の人は、いったい、どうしているのか。どうやってこれを凌いでいるのか。

彼女が目以外の人間、他者である。と自体は深刻な問題ではない。だが求めるとなると事情が異なる。執著とは隔たりをなくしたいと欣求し、より憑かれ、焦燥し、疾駆することなのだ。意識の隔てを反故にして、求めるものに飛びつきたい、破滅的で矯激な衝動に駆られ、それしか考えられない。

普通に他と均しく意識する人には災いではない。苦にならない。そのみを改めて強烈に求め、他が心情から震われるとき、事情は一変する。陋方に執着すれば、小生以外の人間であると言う他者が峻く眼前に異者の絶壁となつて聳えるのだ。一瞥をくれぬ無情の壁となつてしまつのである。基本的に人は皆、誰かを意識すると多かれ少なかれ同様の感じを抱くのではないだろうか。

諦めるしかないのだ。人と自然に触れ合おうとするとは小生にとって瞬きを我慢するようなものである。心臓の動きをコントロールしろと言われるのと同じことであつた。

だがその習習も同じ席に坐っている。坐つてじつと待つている。待ち伏せるかのようである。暗鬱な眼差しだつたに違いない。

諦められるわけがないのは、決断を下した昨日のうちからわかつていた。彼女の眼窩のクリームのような甘やかなグラデーションから離れられない。だつたに思い切つて気持ちを白すべきではないかと言う発言は条理である。だめで元々じゃないか、やつてみなければわからないよ、と言つて人は微笑するかもしれない。一つだけはおきりとわかつていることがあつた。

彼女とは知り合いになれても膜からは出られないと云うことだ。他者性への違和感、他者性となつて自体が既に違和感の表明に他ならないのだが、を免れるとはない。疎外感を拭えない。意識の緊迫を離れられない。畏怖を止められない。自己以外の存在に対して警戒的であることを止められない。

やつてみなくともそれだけは断らかなのだ。もしも交際にまで漕ぎ着けても、ただ心労に果さるだけの、作り笑いのような人間関係しか構築できない。

小生にとって意識とは絶望である。世間から隔離され、内奥に封ぜられ、焦慮することではない。自己の基底を喪つことであり、世界の二員であることを否定されること他ならない。不安や畏怖の切迫ではない。だがわかる。人間すべては皆同じ構造を持っている。小生だけではない。ただ余人は眼を逸らしてしまつていただけなのだ。見せかけの平衡を失えば、必ずや小生と同じになる。閉ざされた暗闇の中で今までどうやって呼吸を

していいかがわからなくなり、窒息感を覚えるように。

いつたい、誰が意識から遁れられようか。どうやって遁れ得ようか。遁れられなうと云うことは妄想のうちには不可能だ。そもそも妄想すら意識の内ではないだろうか

併せて他者性からも遁れられないと云うことになる。一切が他者^もと云う以外の形式で脳裏描かれるとまであり得ないからだ。誰にもできないと云うか、それがどう云うと云うのかを解するところだ。そこから遁れて意識するとはない。これなくして見ることも聞くことも嗅ぐことも味わうことも触れるところも為せない。

なぜこうでなければならなかったかなんてわからなかった。システムに蹂躪されて行くしか選択肢がないことのみがわかる。だから慣れは必須なのだ。

多くの人が麻痺しているにすぎない。だが生きる為には不可欠な麻痺だ。現実から眼を逸し、在りもせぬ鸞を憧憬せずして、どうして生きることに堪えられようか。都合のよい夢だけを観て、欲望の虜となり、狭く日々を狭くしかない。愛情や賞賛が実質的なものであると信じ、有意義な享樂や名声を信じ、それらを求め、希望を抱き、明日を期待し、行動する他にどのような肯定的な生存状態があるか。

よって彼女にいくも恋焦がれながらも何も実働せぬ小生が如き人物もまた愚かな欲の虜となって思いを馳せ廻らせ、楽しむ。

彼女を、古代ギリシア古典期の彫像やルネサンスの絵画やバロックの意匠やロココの衣装を鑑賞するかのようには眺め、様々な悲恋や英雄叙事詩や落城の凄絶、神の如き王たちの死を想像し、邪教の妖姫サロメの舞踊を玉座にて堪能するかのように陶酔する。

時刻が訪れると、ああ、ほんとうに彼女を欲するならば、今こそ去らせてはならない、声をかけて想いを伝え心を捉え、愛の勝利者となって天使の賛歌を天に爆めかせるかの、聖なる栄光を浴びなければならぬと云う強迫観念に襲われ、その度にいくつもの言いわけを案出し、彼女が店を出ると責務を免れた人のように安堵した。

いつたい、小生はこれで何をしているのか。彼女に何を求めているのか。ただ執著し、彼女と給仕とを見張っているだけである。彼女が他人と眼を触れ合わせるところを愛せず、自ら異界にいるかの如く他人事的である。どう云うと云うのか、これは。

いや、畢竟、愛れたいと云うことに相違ない。隔たりをなくしたい。誰かに奪われたくない。他者であって欲しくない。彼女が他の人と心通わすところがないようにしたい。なぜそれが愛されたい欲望に違反するのかと言えはよくわからない。たまたまそれ以外を考えられない。自分と一体であって欲しく、自分のわからない部分があつて欲しくないと云うことしかない。彼女独自の体験があつたり、小生には知られぬ部分があつたりすることが赦せない。それが第三者と共食され、かつ小生の手に届かないものであると云う絶対的に赦しがたい。

相手がどのような小さな扉口をさへ開けることを赦さずに一切開放しろと要求しているようなものだが、その

癖 自身は極度の猜疑と敵愾を抱き、自己の域が一寸でも侵されぬことを恐れ、保守の城壁から出られず、彼女に一步も近づけない。

生来の性癖とは言え、情けなくもある。彼女が他人と目を合わせ、言葉を交わしたぐらいが何だと言っのか。それが胸割けるような非憤なのか。小生に対する不義の行為なのか。ああ、余りにも頑固だ。彼女が小生以外の他人と親しげにするな、別段のことではない。いや、もしそれがどうしても我慢ならんと言つたら、是非はともかく措くとしても、何か手を打てばよいではないか。打つべきではないか。彼女の心をこちらに向け返す何をしないで、心奥を喚いて現実の何が変わるのか。彼女は他者なのだ。思いどおりに運ぶものではない。いや、自分の手足だつて意に反して夢を衰へ時が訪れるではないか。何かがなくては、何かしなくては変わらないのが現実だ。そのことには根柢も正義もない。ただそうなのだ。

熟知しているけれど、でき得る限りにおいてさへ何をせぬ者、求め訴ふる資格があると言ふか。

小生がかような様で彼女に何の約束もしてあげられないのなら、彼女が何をしようが自由ではないか。そもそも別の人間なのだから、異なる世界観を持ち、小生が知らぬ今日までの様々ないきづつがあり、人つき合ひがあり、他者を寄せつけない内的体験があり、独自の意志や思惑があり、推測り切れない懐疑し身悶えた欲望があり、塩梅の配列に組込まれた生得の情念があるのは当然のことである。

それが赦せないならば、もし彼女が小生の恋人になったとしても、解決を見出すことがないのは自明だ。恋人になったからと言って、すべてを掌中にし、すべてが意図に適合し、すべてについて意欲のままであると言ふような状態が来るわけではない。恋を奏せざる為のどのような行動を執つたとしても、かな望みは叶わない。彼女が小生とは別の思考で物事を考え、別の皮膚で感じ、別の心情で想つてをどうにかできるものではない。

彼女をして異なつた世界の中で生きている事実を変えられない。彼女が他者をなくさぬとほえない。彼女の他者性を変へることはできない。

あたりまえだ。

彼女は現実の女なのである。また現実の女だから、愛執も生ずる。現実の女でない女の愛を捉え、愛され何の意味があると思ふか。

もしどうしても彼女の他者性をなくしたいとするならば、彼女と一体化してしまふしかないではないか。実際問題に據ると、彼女になるか、彼女が小生になるか、入我し我入するか、ともかくも同一のものになつてしまふ以外に成就する途はない。受精卵じやあるまいし、まったく以て蒙昧、五蔵児でも無理だとわかる。

しかし、それ以外に要請を満たす方法があり得ないこともまた二つの事実である。欲がそれを指差しているかのようでもある。表現の可能性を別にすればそれしか考えられない。

小生は論としてのこの問題に惹かれた。自身が直面している現実の問題を置き去りにし、没入し始めた。考ふ。

も望んでいることが、内奥に潜存する欲望が、そう云うこととするならば、欲望は永遠にたり着くことなく転じ、小生をして癒されることのない飢餓と渇きに駆り続け、死を迎える日まで安らぎを与えてくれることはない。まづ二人談とも言えぬように思えた。人間だ、人間だ、と訴えてみたところで、脳の基幹は然として両生類やら爬虫類やらなのである。

かくも無謀な欲が未だ健在であつて一向不思議のないものと思へ、小生の求究の欲はいよいよ嵩した。

現に彼女が他者として勝手に振舞うことに根底的な喪失感を抱いている。幼子は母親に対してこのような一体への欲望を抱くと言われている。他にまつた奇辺を知らぬ赤子などにとっては、たとへ瞬であつても母が視界から消え去ることは、大きな喪失体験になると謂つ。

小生はこの時点で、彼女だけに偏つて欲望し、肯定感のほすべてを彼女に委ねていた。依存の現況にあつた。嬰兒とほぼ同じ状態であつた。同じ条件がそろえば同じ状況に陥るわけである。嬰兒も小生も、ともに同じ人間だから同じ構造を有し、それゆゑ同じ症例が出ることに不条理はない。ただ人生経験の差異を考慮すれば少々情けないだけである。

されどなぜ自然に人をして吐えられ害のない欲望を抱かせるのか。しかもただ単に吐えられないと云うだけではない。

もしも現象に対象との合致 一体化など云々ともないことが起こつてしまつたら、どうなのだろうか。欣求していたそれを飲むとして感受可能であつたか。彼女が小生を合致してしまへば、それはもつたの小生であり、合致前と何ら変わらないではないのか。そつちう素朴なそして、ばからしい疑問が大真面目にぼんだのである。

確かに何ら変わらないに違いない。感受とは他者的刺激 他者的ではない刺激があり得ないので、これは片漫な言葉だ。また刺激とは体感上既に感受に他ならないので、同義反復でもある。によつて起る反射である。刺激とは謂わば負荷に捩る緊張 同しく負荷もまた緊張自体に他ならないが、ストレスだ。ストレスが与えられて生じるのが感受 同様にストレスもまた感受自体に他ならない。基本構境ではないか。手で物に触れたときだって、抵抗感である粗さなどがあるから刺激を受けて神経が反応する。他者性とは意識自体なのである。

またそれは諸概念の華であり、この他者性があればこそ諸概念の具象が做せるのだ。見掛上の別名義とも云つてもよい。

とすれば、畢竟、合致とは意識の終焉を意味する。意識の終焉とはあり得ないことではあるが、大変なことだ。意識がなくなれば何も彼もなくなるからだ。意識とは世界であり、まさに瞬間を生きていると云うことの本質ではないか。

よつて他者性、すなわち疎外感や乖離と云うかたちを探らずしては、合致感も頼りない。頼れようがない。端的に考えただけでも容易に解せる。

もし彼女が小生を合致してしまって、そこに自分しか見出せなければ独りなのと同じ、と言った、文字どおりの独りである。自己他者が分明できなければ可悲がない。自分はまさに合致している状態にあるのだなと識ることは不可能である。合致を果たした満足は味わえない。

彼女が彼女でなくては合致の満足はないのだ。彼女の他者性、すなわち彼女と小生の識別可能な状態を維持しながら、合致を果たすのでなければ満たされないのである。だがそのような乖離を残した合致が合致としての安寧を与えてくれるのだろうか。

これは自家撞着である。

合致論は構造的に矛盾している。小生の愚痴なる欲情は物理的に実現不可能ばかりでなく、構造的にも絶対成就できない。

ならば合致要請をやめてしまえばよい。それだけのことである。苦しむばかりで表現性なく、無為であるならば、やめてしまえばよいのである。

と言っは簡単であつたが到底やめられるものとは思えなかつた。息をするとか、胃液を分泌するとか言うのと同じである。指に感される抵抗の粗さをもめることができないだろうか。

なぜならば、指に感される抵抗の粗さとは、我々が認知する段階では、既に『抵抗の粗さ』と言う他者性すなわち意識であるが、これが他者性と言うスタイルをとっていることは、合致させたいけれどもさせられない葛藤を不唆し、つまり他者性とは、既に他者性を調停したいと言う気分の表出、合致させたいとする要請の動きであるからだ。指に感される抵抗の粗さ『抵抗の粗さ』と言う他者性が、既に合致要請なのである。指に感される抵抗の粗さをもめることができないとは、合致要請をやめられないことと同義なのである。

「これが生きていると言うそのものだからやめられないのだ。生きていると言うことが、すなわち意識と言うそれが我々以上であり、我々以前であるからだ。我々が意識するのではない。我々が意識と言う働きの上に現象しているのである。意識すなわち合致要請であるならば、合致要請とは我々以上に我々自体なのだ。だから分離は論外ではない。

指先の感受（『抵抗の粗さ』）と言う意識をやめることができないと言う、ごくあたりまえで直截的な体感には、かように強烈な源泉がある。

いったい、通常人間が稀なる豊満さを有する異性に執着するのは、避けがたい衝動ではないか。小生は「それを愛しまぬ」となぞ考えられない。余人が所有せぬものを所有する優越に烈しく憧れずにはいられない。これに空想を廻らせずいられようか。素際に、小生は一瞬たりとも彼女を想わぬときがない。高潔にして清廉なる異性を眼の前にして、それが我が為に取り乱し、焦がれ崩れる様相へと至る過程を眺めたいと切望せずにはいられない。優位の満足求めずにいることなどできない。恋愛が性的な希求以外に、優性の確認を求める根幹的欲情に基

づくのは知られた事実だ。

これら二切は自己肯定の状態と言ふ。

自分の立場にとつてよいもの、有利なもの、自己を実現するものを欲し、自分が他者に対して優位であることを希い、他に比して優位である、肯定的なうべき状態に至りたいと云ふ、欲望の基幹となる欲である。

比較的原始的な、暑さ寒さ苦しみを避けたい欲や飲食欲や生殖欲などもまた自己の肯定的状態を求めている欲と捉えれば、自己肯定欲とは、生命の原理の原理であり、最底層に根づく欲望である。

また死こそ最大の自己否定と言ふ。

すなわち合致要請は、生の基底にある自己肯定欲と密接であるがゆえに、小生を凌駕し、かくまでも根源的に人間の現存の構造に奥嵌していると言ふよりは、人間の現存を構築している。合致要請は生そのものだとも言ふ。だから『抵抗の粗さ』は物理的にも到底離れることができない実在として現にあるのである。

小生の求愛は自己の欲如を充足するが為の欲にすぎない。

そもそも欲するとは缺けた部分を充たそうとするの意である。自己に不足するものを補おうとすることであり、完全なる自己を実現しようと欲する以外の何者でもない。

また小生がかくも深く動揺し、自己への愛がこれほどまでに強く衝き動かすのは、根幹的な自己の存在肯定が損なわれることを怖れる、存在の不安があるからである。

そしてどうなるかと言へば、不安を感じる者は皆、不動の安寧を欲する。揺ぎのないものを、絶対性を希求する。一度不安にとり憑かれた者はどのようなものにも不安を見出す。所謂 猜疑と云ふ奴だ。実に人間はこれに悩まされる。結果的に優位を求めるとは、最強の優位を欲すると言う以外の態度しか做せないのである。そして他者に比して絶対優位ならんとすることを欲し、自らの做すすべての意向が悉く成就し、缺けることな自己を全能的にまでに実現し、不慮の事態すら起こさず、まさにこの世の一切が自分自身であるかのように安寧であること、自らの存在の安寧が損なわれることのない完全なる安寧、永遠に不動の肯定された状態に到達することを欲する。皆人は将来へのこの暗黙の期待のうちに生きているのだ。

だが先述のとおり自家撞着によつて、この欲は叶わない。普通思考しても叶わないのは自明だが。このときの対応は二つしかない。強烈に駆られるが、他者性から眼を背け、麻痺甘んじ、辛うじて心の平衡を保つかである。そうしなければ不安によつて基底が突き破られかねない。未来一切が消失し、精神が方向を捉えられず、自己の存在が崩壊し、本質的な死を招く。

普通の状態の人が小生のような袋小路に追ひ込まれないのは、様々な欲望を適度に抱き、神経症的に二つの間に過度に執着しないからである。そうすれば容易に根幹的な存在の不安に陥ることもなく、人生を遣り過せるからである。

思いつめた小生のような状況の者は彼女に対する合致要請が成就すればすべての欲望が満たされ、一切の自己

表現が成され、全能に至る、それしかない、と云ふ情態隨ふ。肯定のすべてを彼女が受諾してくれるか、してくれぬかに賭けると云ふ、露骨に不安定な状態に自らを追い込む。そうしなければと小生が如き性癖の者でなくとも心安らかでないわけがない。彼女が否であればすべてが終わってしまうのである。狂執するも不思議ではない。

本来人は皆、存在の不安の中にいる。欲望の存在がその証なのである。かような思想に至つて、心底からの満足を覚えた。

生物学的な問題と繋がつたからである。

全的な合致とは、あらゆる意味で抗う者のない状況、怖れが一切霧散し、無敵同然で、揺るぎなく生存を全うする者となることである。だからこれは生物であるとの本旨、生き続けようとする志向性と結びつく。遺伝子に内包され、諸細胞に構成される生存への意志、繋ぎられる理論なのである。

アメーバやオキアミやシダ類や駝鳥の卵など少しも変わらない。生存によつて、生きることを、生を存続させることを命ぜられ、不滅の生存者たらんと欲し、焦駈狂奔する。生きていると云ふこの瞬間は皆ここに端を発している。自己の肯定的状態を求めるとは、このことなのである。指天の感では、これなのである。不死なる支配者たらんとするか如く、すべての他者性の異逆を平定しようと欲するのは、この為なのである。

自己肯定の根拠を他者との合致に求めるのがその晰らかな証拠である。生き残れるかがすべてなのだ。

だから常に問題にすべきは、暴漢の脅威であり、征服すべき麗人であり、飢饉や寒さや病氣や日照りの苦しみから遁れることであり、金銭や家産数や言い食事も贅沢な衣類を失ふ心慮のないことであり、家族や恋人や自らの心臓の鼓動である。予測しがたく自在ならず、常に不安を起させる他者のみが問題とされるのは、その所以なのである。

彼女への欲とは、一様態にすぎない。

珈琲が冷めていた。小生は忽然とこの場に放り投げられた者のように周囲を見廻す。異様なものを眼にするように眺めた。引き裂けるような強暴の音が現実と云ふ名の画像を縦に切り破る。

翌朝は天晴れ好日であった。

小生は鬱素を欲し、龍套神社に足を運んだ。『サン・ミッシェル』へ赴きたいと云ふ、駈られるような衝動が俄かに勃発する兆しが見受けられなかつたが、どうにも本気になれない。石畳の参道をたどつた。鬱蒼とした樺木の大樹が連なり、神域を包む。鳥居をくぐり、苔むしてあちち欹けた石段を上り、境内に入った。――神木の老杉を右に見ながら、本殿へと進む。

急勾配を倣す檜皮葺の屋根に千木が高らかに交文し、切妻大の春日造で、また龍谷独自の特徵もある。全体に屋根が大きく、床が高く、向拝の階段の傾斜が著しいことだ。屋根は破風から軒までを反り伸びて、広げた翼のようでもある。社本体の偉いとも幅があるように見えた。

向拝を蓋う屋根の軒下に社の柱と向拝柱とを繋ぐ虹梁が渡っており、龍の彫りものを做してそのまゝ向拝柱に絡みつき下り、参拝者に裂口を開く。

小生は逍遙した。古びた手水舎や石垣を眺めたり、杉の樹皮に触れたりする。楓の枝振りや、濡れて黒っぽくなっている櫓の、樹皮の起伏が黒と灰色との斑文で、うねるような様が龍脚の如く見えるのやら、そこに明るい緑の苔があるのやらに眼を留めたり、葉桜の垂枝を見下ろして地を這う大蛇を連想したり、お社が背負う杜はすべての木々がお社に覆い被さるように勢を傾けていたりするなどと不思議に思ったりしながら時を過ごし、次第に時間の流れが緩やかになるのを感じた。

普遍的な一般概念を以て眺めてしまえば、特段のことはない。だが精細巧緻を追えば、繚乱し、たちまち豊穠となるその様相は捉えがたくなる。心を惹いて止まない。

この事態は容易に解明できる。

心惹かれて止まないとは、捉えたく焦燥し、奮闘していることだ。捉えられないものはすべて意背くからだ。他者としての他者性を貫き、異逆を倣し、揺さぶる。他者性状態を排したく、合致に到達したく、あかく。それゆえ、動物は皆、他者性に喚起され、関心が赴くよう造られている。すなわちそれは魅了されることをも含むのである。美に堪えがたいと言われるのは、この事情を指す。苦しみと歓びとに駆られ、他者へ、外へと飛翔せんとする。

だが成就しない。相も変わらぬ自家撞着に襲われる。

もし、他者性を持つ異逆、離反性という象が、諸概念の彫像に私たち倣されなかつたならば、剋され、鞭打たれることもないが、興趣の情も味わえない。と言うか、生きる欲求が生じない。

小生が彼女への欲を逐げられないのは幸いなのかもしれない。自然を捉えられないのは素晴らしいことなのかもしれない。捉え切れてしまえば、生き甲斐がない。魅了されることもなくなる。捉えられるようなものが現実的なもの、切実として感ぜられるか。いや、それ前に捉え切れて安寧してしまふようでは、未来への心慮なく、人生を倣すべき理由がなくなる。

人間の認識が把握する便宜の爲だけにあとを考れば、いかんとも解しがたい現象ではある。

しかしながら、生きる意欲を駆る為には、この絡繰りがあると思えば、すつきりと嵌まる。他者性がなぜ異逆性なのか、なぜ他者性を維持した合致があり得ないのか（一見あたりまなことのようだが、論議は曖昧だ）、このとき小生は気がついた。が断らなかつた。他者性は他者に事実としてある本質ではなく、こちら側（と言つても小生の、ではない。小生の生存の、である）に内在する動機の問題である。こちら側から仕組だものなの

だ。始めに不一致の結論があり、それ以外の一切は肩掛け上の体裁、事務的な処理でしかない。旦那様するようには構築されたから旦那様するのだ。人をして執着を熾し、より強烈と渴き求める焦燥の怨讐を倣し、生へと向かい続けさせる為だけの架空の絡繰りだと解すべきなのだ。

だから絡繰りは以需と言え。意識、世界、生きることであり、捉えがたい豊穠の様相を顕在し、人生の妙義を倣す。

善哉。
よきかな

二日後、辛抱たまらなく、真神鉄道に乗って難入驛へと向かった。
まがみ

店には誰もいなかった。いや、客はいた。店長がいた。店員もいた。あの男を除いて。そして午後五時まで待ったが彼女は来なかった。翌日も同だった。翌々日もであった。若者も彼女もいない。

「あの」

「はい」

多分生身のアルバイトなのだろう、ウエイトレスが怪訝そうな顔をした。

「ほら、前にいた彼、こんな感じの髪型さあ、背が高かった」

若木さんのことですか」

「そつそつ。そつどと思つ」

「辞めちゃいましたよ」

「何で突然に」

「さあ、染物屋さんを継ぐんじゃないですか。何か、急ぎの気になったんだみたいなのと言っていましたよ」

「染物屋だったのか。どこにあるの」

「ほむほむ 駄邸だったと思いますけど。以前はすぐ嫌がつてたんですよ、継ぐの」

小生が駄邸を降りたのは午後四時ごろであった。

貞観正國寺に向かう路を途中で少し外れ、と藍染屋はあった。真神の藍染めは伝統ある手職だ。古くは眞神湾に浮かぶ安房島の社に奉納する布に龍神の紋を藍染めで入れたところ記録が残され、江戸時代中期には既に名が知られていたらしい。

菱屋は敷地を白い塀で囲んでいたが、一部を割いて店舗としていた。商家と言っよりは工房と言っべきであった。櫓や檼の太木の猪間から母屋の堂々たる意が広がっているのが覗かれる。店主の方へと向かった。店員は狭く暗く、棚に無造作にたくさんの染物が積み上げられ、店番の老婆が小さく坐っている。

何もわからなかった。離れがたかったが怪しく見られて困るので、駅へ引き返さざるを得なかった。

電車に乗り、考える。

二人は終に結ばれたのだ。彼女の為に彼は正業に就く決意を固めたのだ。小生はそう思い込んだ。所詮が絡繰りなのだ。実体はない。苦患に価わない。恋慕する人を失うとに矢恋と云う事実はない。すべて駆る為の架空にすぎない。

しかし、現に人々とともにこの渦中に生きていながら、独りさような省察するところが楽しかったか。愚か者どもとともに妄執し、吝しみ、妬み、恨み、嘆き方がまだしもまじではないか。

家で寝るしかなかった。

その後数日は猛然と小説を書き綴り続けた。原稿を破り捨てた。時々寂寥を玩味する為に『サン・ミッシェル』に寄った。曹洞宗建長寺派龍蔵大嚴寺に参禅し、某寺で『ハイデガー』、それは何か、存在とはを臆講し、一週間で二十七冊を読み、豪雨の日に裸体で三和歌山に登り、樺木に絡み葛にしがみつき、烟の勢を睥睨した。執著諸々の細胞の隅々にまで染み渡っている。心は欲し求める。欲し求めても欲し求めても身が炙られる如く焦がれるだけではない。涸渇が癒えるところがないのは自家撞着のせいである。わかったって足にならない。せずにはいられようか。無為であつても現実であつた。生存に封ぜられている。絡繰りを疾駆するしかない。

自由が欲しかった。この苦しみから、焦燥から、生存の鞭から永遠に逃れたい。

なぜ小生は普通に現実と闘えなかったのか。彼女に交際を求めればよかったではないか。好かれるように工夫すればよかったではないか。誰でもするところではないか。なぜ普通の人は普通に振舞えるのか。なぜ小生は臆病なのか。なぜあつと言つ間に彼女が存在意定のすべてと化し、小生は簡単に追いつまれたのか。なぜこつも過敏なのか。なぜ人より不安に陥易いのか。不安を生ぜしめる物質が脳内に分泌され易いのか。なぜ小生の意識は幼少時から均衡を失っていたのか。なぜ生まれつき他者が露わな身を剥く姿が見えていたのか。選択したわけでも敢えて做したのでもない。余りに埋不尽ではないか。だが理とは何か。理が何だと言つのか。そもそも概念が無効であるところのに、これらに構築される理が廢墟でない筈がない。

人間を焦燥に駆る為の絡繰りではないそれに、仁義礼を糾しても声帯が空気を震わすにすぎない。

なぜかを、何者であるかを問つても答へはない。永劫の葛藤を生起せしめる為の自家撞着。その絡繰りが仕るだけである。すべて事務処理ではない。

このとき小生の脳裏に一つの齟齬が及び、茶室に端坐したまま、微動すらできず、猜疑に囚われた。

我々は絡繰りに気がつくことができる。無論、構造的に許されているからだ。だがなぜ生存の構想を做した者は絡繰りを垣間見させるのか。生の存続の女が目的であるならば、隠匿したままでいた方がよかつたのではないか。これほど巧緻なる創業者が敢えて見せるからには、絶対に意図がなければならぬ。

だがいったい、この絡繰りを知らしめることでどんな効果を創業者は期するのか。それは絡繰りを発見し

た者がどのような情態になるかを分析すれば解明を得るに違いない。小生はこれを垣間見、どうしたくなったか。どう云う気分になったか。

問うまでもない。自在奔放になりたい。炸裂するような威勢を以て執着を振りちぎり舞い、生存の絡繰りを突き破りたい。狭陋なる我執の繰返しを解脱したい。脱自エカスタシスの空間へと躍り出く、広大無辺の歓びに拡散し、前後左右上下を封じしる壘を超駕し、外部になりたい、無限大の宇宙に、客観性になりたい。

だがこれはどう云うことなのか。生存の法則に叛らうことなのか。なぜ生存がさような設定を倣すのか。自裂行為か。いや、そう思えなかつた。これが生存の法則に叛らうことだとは感じられなかつた。むしろ、このような威勢こそが生命そのものなのではないか。これが平常な生の状態とは言えないか。我々は生存を誤解してはいないか。生存とは生を倣し、存続せよとするところだけが趣意なのではない。

小生には強くそう考えられた。

エカスタシス

生存の本欲とは、脱自、生を拏ぎせることではないかと直観したのである。

そう云う風に撞きると、何のことではない、存続と云うことが拡大の属性の一つにすぎないところだと思ひ至つた。拡裂とは、存続し続けることを言んでいるのではないか。

小生は陶然とした。これこそ真の生存の法則なのだ。絶対にどうでなければならぬ。このような直感が真実でないわけがない。

強裂拡散 あたかも陰極まで陽となるが如く、自身の顛覆骨を踏み砕いてまでも高く大翔けよとする。常に自己の例外となつて自己を乗り越え、より強くより大きくより高度になつてとする。

これが生であるまいか。自らの現状を常に呑み、すなわち否む者としての自らをも破碎し、自らを喰らい尽くしてしまふ原蛇の如く、想像を絶する境涯へと逝く者となる。

眩暈をも覚える脱目感覚が襲つた。一瞬、恍惚とした。それはわずかな時間であつた。なぜなら小生は次の刹那には早くもその境涯を否定し、焦慮の情態へと戻つてしまつていたからである。執拗に糾さねば気の済まぬ性分、恐ろけは怖いのだ。不妄物質が脳髓に分泌さる易い体質に生まれついているに違いない。それが幸福感を赦さぬ性癖の源泉なのだ。解剖学的気質の生理的動機だ。それが休む間もなかなかなる猶疑を小生の心情に構築したのだ。さよふなればもつ、そうするしかないのである。

その猶疑とは、もし仮に自ら撞着から解脱してもどうなるのか想像もつかないが、生存の絡繰りを超越することには、あり得ないところであつた。我々は生存の倣う絡繰りの上に現象する産物でしかないのである。もし仮に、これを超越したとすれば、仏教を讀つてその解脱の境地に相するであらうが、その仏教においてさえ生存中の解脱は完全な解脱ではないとされている。生命維持のために食呼吸を要するからである。合致要請を完全に捨てたとは言ひ切れない。仏陀その人でさえ、死の病に斃れたとき、涸渴して水を所望したと伝えられている。

いつたい、生存の超越などあり得る筈がないのである。我々は有機物の化学的反応の上に刹那的に構築された現象にすぎないのだから。

いかなる意志向もそれらは細胞から発している。何を欲し、どう考え、企み、意図し、何を志向しようともすべては同じことなのだ。

慥かに生は拡大し続けようとしているかもしれない。陋を解脱しようとするのかかもしれない。だがその意志はどこから生じているのか。誰が生み出したのか。少なくとも自分ではない。いかなる意欲もインパルスではない。諸細胞の働きではない。化学的現象の上に成り立っているのである。どうやってもどこから遁れられる筈がない。だが遁れられないと云うことも、絡繰を倣すだけの諸概念の二類であるとするは、いつたい、何が何だと言つのか。

小生は儼然を禁得なかつた。だがいずれにせよ、絡繰からいくらかでも脱し、たとえば人間が類人猿などに比べ、いく分か生存の絡繰から自由であるように、今の人間より少しでも高次となれば、ましになれる可能性もある。『まし』であれば、『まし』でないよりは、『まし』な筈だし、苦しみ遭つ者にとつてすれば、治癒をなくとも鎮静剤がどれほどあり難いものか。

だが哀しいかな、小生はと言へば、観望ばかりが先走り、その『まし』に至ら到底及びもつかない。兆しすら見受けられない。

口然として、彼女が小生と異なる存在者であることを、小生の意図を疎外し、一瞥さそくれない他意であることを、触れるとすらかなわない、異なつた事象であることを受諾できない、彼女が誰を愛つて彼女の勝手であつて、小生の拠りするべきことではないと笑ふないし、彼女を彼を祝福するなど、絶対に心が従わない。

茶室に端坐し続けるのみであつた。一步も進捗しない、惨めな小生がただ独りこゝにいただけである。彼女が彼を愛し、彼らが睦み抱き合う姿を想像すれば、胸破の憶激や自暴自棄な哀しみに引き裂かれずにいられない小生が。

数年後、家業を手伝い始めていた。それに至るまでの間、新人文芸賞に七回応募したが、すべて第一次選考の壁に阻まれ、小説家への夢は果てていた。骨董もまた愉しからずや。日々は安穩であつた。現実から眼を逸らし、麻痺し、夢遊病に陥ればよいのである。

さて、かくも翳りを帯たる羞慚に浸るに、自らを憫れぬ寂寥と憂鬱との甘美に抱かれながら過す日々にも慣れ、茶陶に凝り出し、土味がごつちと言ひ始めた、今より半生ほど前のことである。

何の用事があつてそんなことをしたのか、はゞ憶えてはいないのだが、小生は書斎の隣にある小部屋、桐の戸棚を開けた。そこには代々収集した茶陶が蔵されている。箱に収められた上に袋に入れられたものから、ただ紙に包まれたもの、剥き出しのまま置かれたもの等々数ある中で、ふと志癖が目留まつた。手に取る。

傾けたりしながら、ゆつくりと景色を眺めた。凌駕せる丘の頂上に立つて、壮観なる眺望を、遙かな地平を、崇高に見据える者のするように。

粘土を踏み圧し空気を抜いた上で捏ねて整形し、釉を塗って重ね、窯にかけて高温で焼いたすぎぬものである。ただの焼かれた土である。冷たい物質である。冷えた感触が掌を指先にある。凹凸の起伏の感がある。

傍若無人で、無骨に人の意表を突く諸。

古い物ではない。逸品でもない。だが存在するものすべてには、いく歳月を経たような、無着情の深み、無機質な石の神殿のようなものがある。年を経た木造建築の乾き切った木のぬくもりの如きとめどない味わいや、山風水月、石櫛花、古梅の樹幹、蟹膚に似たそれが。

この志野碗にばかり固有の性質ではない。普すべてに常住する性質である。だがそのときには、そのたった一つのものにしか感じられなかった。その一瞬にしか感じられなかった。矛盾ではある。

だがそれが現実性となつ奴ではないか。あれば、あつたとおりだ。もともと理由なんか知れない。

ニューロンの軸索にまで伝えられたインパルスが受側の樹状突起にある受容体に分泌物を発射し、受側破膜のナトリウム・イオン・チャネルを開いてナトリウム・イオン濃度を上げ、静電位の状態を発火的現象せしめ、微小類の繁殖、アミーバの分裂、ウィルスの活動、水素と酸素との結合、それではないではないか。

ふと過日、龍石神社で過したときのことか回想されたのである。

同時に経緯もなく余りに唐突に、奈良の大神神社の記憶が甦った。千鳥唐破風の拝殿の奥には、ただ脇置居を左右に附した三輪置居があり、蟹座を有す標高四六七mの三輪山が聳るばかり。

茶室へと向かつていた。坐す。炭を熾し、茶釜掛けた。炭斗から炭を取り出す。香炉にくべた。野雁の羽箒の下に隠れていた茶柄の火箸を指にはさむ。湯気が立つてきた。碗を握る。棗を開けた。茶杓を握す。

白竹の一本樋の、中ほどに竹の節がくるように詠われ、蟻腰の見掛、丁寧に漆拭がされた竹篋が、裂に包まれた棗の傍らに斜めに置かれていた。

気がつくと、信樂に没入している小生がいた。唐突に世界に投げ出されたような感じだった。こちらを見ている祖父の表情を皮膚で感じつつ、眉間に力を入れ、見入り続ける。蛙目粘土が、木節粘土が。

老いた数輩者は小生の表情をまた面目がついているに相違ない。鹿爪しゅうするのは、よきか、真々、と笑いながら、口癖となつている科目を吐いた。

茶陶つてのあな、ぶつぬき擲つちやつとかにや、妙義になれんもんじや」

完

とまあ、こんなものである。では、いつか仕上げる気力も湧くであらう。『戦争と平和』のヒエールとナターシャのごとく、人生が続く限り生活力が戻り、それが戻れば平々凡々たるおじさんおばさんになつて日常の茶飯の雑事に埋没するものなのである。